

ゼロ災めざす小集団活動

坂下・庶務課厚生係 西野 一 男
 原 義 一
神坂製品事業所 木内 伸 夫

要 旨

生産活動は、小人数の小集団のチームによって行われる。この第一線で働く者の安全を日々刻々に確保していくには、職場や作業にひそんでいる危険要因を発見、把握、解決するチームの行動を充実するとともに、作業者の危険に対する感受性や問題解決の能力を高め、現場で実際に作業するその時、その場に即して指差呼称で安全を確保することが必要となる。昭和58年度から危険予知に指差呼称を組みこんだ新K・Y運動を取り入れ、ゼロ災害にむけ小集団活動を活性化してきたので報告する。

はじめに

当署では、ゼロ災害全員参加運動を始めて10年になる。

昭和47年6月8日、労働安全衛生法が施行され、安全衛生に関する企業の自主的活動を促進し、人命尊重の基本的理念に立ち、これらを軸としてより強力、よりの確に推進しなければならないこととなった。

当署では、昭和48年7月4日をゼロ災害発足記念日とし職場の自主活動を進めてきた。

I ゼロ災害運動の推進について

ゼロ災害全員参加運動は、人間尊重を基本理念とする3本の柱が相互に関連し支えあって推進され、一つが欠けても進展しないものである。

1. トップの経営姿勢
2. ライン化の徹底
3. 職場自主活動の活発化

昭和48年度の職場自主活動は、緑十字グループがグループごとに実践目標を決定し、その実践目標を全員で達成することに努めた。

又緑十字グループは、機械、設備、作業環境、作業方法の徹底した見直し、改善をすすめ、職場は自分の意欲が正しく評価されることもあり、集材架線の改良、安全な架線方法、間伐作業の安全化と能率の課題として木廻しガンタの改良等が積極的に進められてきた。

昭和52年度の職場自主活動は、緑十字活動のミーティングが活発化し、「安全作業留意事項」、いかえれば作業を行なう場合危険と思われる事項をピックアップし、その重要とされた事項をスリーポイントとし全員がこの目標を実践してきた。

この頃、機械、施設等技術的な点検を精通者をして行なう「施設点検」をもうけ、施設事故は皆無という状況となった。

職場の災害は46才以上のところに集中している現状から、緑十字グループの中に「体力推進員」をもうけ、体操の励行、定期的血圧測定、時間外のスポーツなどを指導し、昼休みにバドミントン、キャッチボール等を実施するところも出てきた。

このように安全衛生活動をつうじ、生産活動の面でも「ヤロウ、ヤルゾ」という組織風土が生れてはきたが、災害発生件数は年平均6件という有様であり、なんとしても当署にゼロ災害の目標を達成させる必要があった。

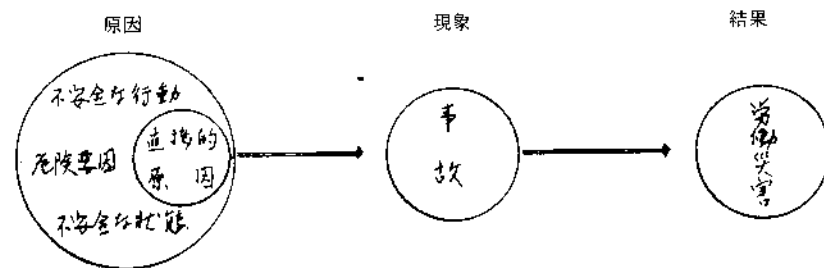
II 新K・Y運動の展開について

昭和58年度、こうした経過を反省し活性化する小集団活動を作りあげようと、新K・Y（危険予知、指差呼称を合体したもの）を実践することとした。

1. 危険予知とは

安全を先取りするには、危険に対するチームの感受性を高めることが必要である。

- (1) 職場や作業環境のなかにひそむ危険要因を発見する感受性を、個人のレベルからチームのレベルに高めることが必要である。
- (2) 危険要因について話し合い、考え合い、分り合うための短時間ミーティングが必要である。
- (3) 行動する前にチームで問題解決能力を向上することが必要である。



即ち災害の原因となる事項を個人ごとに出し合い、気づかない事項を相互に感じ、行動の過程で個人が排除するのである。

2. 危険予知の進め方

初歩の段階ではイラストシートに描かれた職場や作業の状況を見て、チームで話しあう訓練を行なう。当署では昭和55年度から実際に行なってきた。現在では現地において、その日その日の現地の状況から、短時間ミーティングで実行している。

ラウンド	問題	危険予知
1 R	事実をつかむ (現状把握)	どんな危険がひそんでいるか
2 R	本質<原因>をさぐる (本質追求)	これが危険のポイントだ
3 R	行動を開始する (目標設定)	みんなのレベルで実践する

3. K・Yと指差呼称

「これが危険のポイントだ」が2つ、5つと出されるこれをみんなで確認しあいながら、最後に一つの作業で一つの目標にしばり込んでいく。そして行動目標をみんなで指差呼称をし、「～を～して～しよう、ヨシ」と大声で行なうのである。

この指差呼称は現地で作業する段階で一人にK・Yとなり、対象物、周囲、相手の位置、操作機械に対して実行されるのである。

おわりに

ゼロ災害運動10年安全衛生活動の重大性は理解できても、それがゼロ災害となる事の困難さを組織全体で感じ、常に現状の課題を速く正しく把握し進めなければと考えている。

当署における新K・Yをすすめるにも、タッチアンドコールは子供のやる事だとか、危険予知はやっているのだから声は出さなくてもよいではないか等、いろいろな意見があるが、これからも批判、助言をいただき反省を加えながらすすめていきたいと考えている。